

氏名(本籍)	金成姫(中国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第2559号
学位授与年月日	平成23年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本語と中国語におけるとりたて表現の対照研究 - 「も」と“也(ye)”の対照を中心に -
主査	筑波大学教授 博士(言語学) 沼田善子
副査	筑波大学教授 Ph.D.(言語学) 竹沢幸一
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 杉本武
副査	筑波大学准教授 博士(言語学) 渡邊淳也
副査	筑波大学准教授 佐々木勲人
副査	東京大学准教授 Ph.D.(言語学) 森芳樹

論文の内容の要旨

本論文は、日本語研究から創出された「とりたて」という概念・用語を用い、とりたての機能という側面から中国語の副詞“也(ye)”と“都(dou)”の分析を試み、これらと日本語のとりたて詞「も」、「さえ」、「まで」との異同を記述しようとする対照研究である。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章 序論

第2章 「とりたて」概観及び本研究の立場

第3章 「同類・累加」の「も」と「同類」の“也”

第4章 「意外」の「も」と“也”

第5章 「意外」を表す類義語間の対照 - 「さえ」と“都”を中心に -

第6章 終論

第1章では、研究の目的、考察の範囲、論文の構成が述べられる。

第2章では、まず日本語の「とりたて」及び「とりたて詞」に関する先行研究の概観の後に、本論文でのとりたての機能の定義が行われる。次に、中国語でとりたての機能を有する副詞に関する先行研究を概観し、同時に中国語の副詞研究における問題点が指摘される。その上で、日本語研究におけるとりたての概念を中国語の副詞研究に応用し、「も」と“也(ye)”を中心に両言語を対照する本論文の意義と位置づけが述べられる。

続く第3章から第5章が本論文の考察の中心となる。本論文では、「も」をその意味から「同類・累加」の「も₁」と「意外」の「も₂」の二つに分け、中国語の“也”を「同類」の“也₁”と「意外」の“也₂”の二つに分けて考察を進める。第3章では「累加」の「も」と「類同」の“也”の統語的特徴と意味的特徴の異同及び両語のとりたての焦点と作用域が考察される。

第4章は「意外」の「も₂」と“也₂”の考察である。本章では、数量表現をとりたて際の両者の振る舞いに着目した、意味上の異同の考察に加え、とりたての焦点の文中での出現位置に着目した、両者の違いが考察される。

第5章は「意外」の意味を表す類義語間の対照である。ここでは「意外」の「さえ」と“都”を中心に、「も₂」、「まで」と“也₂”も含めて考察される。はじめに、同一語形で意味・機能の異なる語が存在する“都”に関して、その弁別基準を示してとりたての機能を有するものを「意外」の“都”として取り出し、この“都”の焦点と「さえ」の焦点の文中での出現位置の違いについて検討する。次に、日本語における「も₂」、「まで」、「さえ」の意味の異同、中国語における“也₂”と“都”の意味の異同についてそれぞれ考察し、それらを踏まえて、日本語と中国語の「意外」の意味を表す語の意味的対応関係を体系的に分析、記述しようとする。

上記3章の考察を通し、以下のことが明らかにされる。

「も₁」は「同類・累加」、「也₁」は「同類」という意味を表し、「同類」という意味では両者は対応関係をなすが、「累加」の意味を表さない点で“也₁”は「も₁」と完全には対応しない。また、「も」が「累加」となる環境・条件は、「自者－肯定」と「他者－肯定」を同時存在として捉えられる場合だが、中国語ではこのような場合、“又”等の他の語が用いられる。また、「意外」の「も₂」と“也₂”は、「自者」と「他者」の間に序列があるとき、“也₂”は序列上、下にあるものしか「自者」としてとりたてられない点で「も₂」と異なる。さらに、「意外」の「も₂」、「さえ」、「まで」は「自者」が「自者」と「他者」からなる序列上の上限（「まで」）か下限（「さえ」）かあるいはそれらに対しては中立か（「も₂」）という、程度の極限に注目し、それにより使い分ける傾向があるのに対し、中国語における「意外」の意味を表す“也₂”と“都”は、予想していたことが「自者」についてのみ覆されたのか（“也₂”、“都”）、「自者」「他者」共にすべて覆されたのか（“都”）、という意外の程度性に注目し使い分けられる。

一方、統語的特徴について、「も」は、文中において分布の自由性があり、主語、目的語や述語など、文の様々な成分の後に付くことができるのに対し、中国語の“也”は、述語の前、あるいは主語がある場合は、主語の後、述語の前という制限が課せられており、その分布が比較的固定している。この点で両者には顕著な違いが見られる。

とりたての焦点については、「も」と「さえ」は文中での分布が自由なため、その位置から焦点を示し得るのに対し、“也”と“都”は文中において述語の前に位置するという制限があり、その位置からは焦点を示し得ない。また、「意外」の“也₂”と“都”は、これらの前に「意外の焦点位置」があり、とりたてる要素をその「意外の焦点位置」におく必要がある。とりたての要素がその「意外の焦点位置」を離れる場合は、主題化などの文法的要請によるものであると考えられる。

「同類・累加」の「も₁」と「同類」の“也₁”のとりたての作用域に関しては、「も₁」や“也₁”を含む節の述語を中心とした範囲で節境界を越えることはないという点で共通性がみられる。一方、「も₁」は、基本的にとりたての作用域の先端か末端を表示するのに対し、“也₁”の現れる位置は、「も₁」の作用域の末端に当たる要素—端点Ⅱを示すことはできても、「も₁」の先端に当たる要素—端点Ⅰを示すことはできず、その先端に当たる要素は文脈などの語用論的情報から決められる。

以上に続き、第6章では、本論文の考察のまとめと今後の課題が述べられる。

審査の結果の要旨

従来、意味による下位分類に研究の関心が集中しがちであった中国語副詞の中で、いわゆる範囲副詞について、“也”と“都”をとりあげ、日本語研究での「とりたて」の概念を用い、日本語のとりたて詞「も」「まで」「さえ」とこれらを対照することで、本論文は、中国語の副詞研究に新たな視点を与えている。同時に、

日本語研究の中で独自に創出された「とりたて」の概念、あるいはとりたて詞の分析観点の他言語の研究への応用可能性をも示している。この点で本論文は、両言語の研究に新しい可能性をもたらし、その発展に大きく貢献するものと言える。

また、本論文の中で具体的に指摘される「も」「まで」「さえ」と“也”“都”の意味記述、文中における焦点要素の位置の特徴等についての指摘は、いずれも興味深く、特に中国語の研究では、これまで看過されがちであった現象に新たに光を当て、これらの語の記述を精緻化しており、この点でも高く評価できる。

一方、逆に、本論文が日本語のとりたて研究を参照し、中国語との対照でこれらの研究成果を中国語研究にも応用しようとするところから、分析が、ともすると日本語からの視点に偏り、これと切り離れた中国語自体の独立した分析、考察の視点が十全でない点が課題となる。中国語における副詞がいかなるものか、その中で範囲副詞が独立した文法範疇として認められるか否か、その位置づけなどについての言及の不十分さにその一端が現れる。

また、日本語の先行研究を参考にしつつも、ここで述べられる概念、用語が正確に捉えられているか否か、例文の意味解釈の妥当性、具体的な現象分析の客観性に一部疑問が残り、さらなる考察の余地を残している。とりたての焦点位置について本論文で示される興味深い指摘についても、文の統語論的構造からのより深い分析を行うことで、さらに精緻な記述が求められる。

しかしながら、これらの課題、特に中国語の副詞研究における範囲副詞の考察は、中国語研究全体の課題でもあり、本論文の成果はこの進展に大きく貢献することに疑いはない。また、本論文が日本語だけでなく、中国語、あるいは日本語と中国語の対照まで含めた範囲でのとりたて研究に、新たな視点を加え、進展の可能性を開くものとして、高く評価される点はいささかも揺るがない。本研究の今後の発展を大いに期待するところである。

平成 23 年 6 月 8 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条 (1) に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。